純情騎士と、
異世界からの強制送還に
失敗された不憫で不幸な私の話
[不説 story] 黒ごま × [挿絵 illustration] 七里慧
試し読み版
Chocolat Sucré

夏樹の章　プロローグ・強制送還は突然に

城の地下の床に描かれた、複雑な魔法陣。
その中央に立たされた一人の少女。
魔法陣はそれ自体がまばゆい光を放っており、既に発動してしまったことを彼女に如実に伝えていた。
「ま、待ってください。グレイさん、話を、そんな、突然こんな……！」
少女は今自分の身に起ころうとしている事態が理解できず、狼狽しながら声を上げた。彼女の目の前に立っている黒髪の青年――グレイが、そんな彼女を見て、少しだけ寂しそうな顔で笑う。
「エト、お前は今まで本当にこの国に恩恵をもたらしてくれた。だから、もう十分だ。お前は、お前を待っている人のいる世界に帰れ」
そう言って、赤みがかったこげ茶色の目を細めて柔らかく微笑む。
微笑んでいたが、彼のその言葉から感じるのは明確な拒絶の色だった。彼がそんな表情で自分を見たのは初めてだ。もう二年も一緒に居たというのに。
（足が、動かない……！）
魔法陣の魔力に捕らわれ、エトの足は根が生えたように魔法陣から離れなかった。必死でグレイに手を伸ばすのに、彼は微笑んだまま、決してエトの手を取ろうとはしてくれなかった。

愕然としてグレイを見る。
——どうして。一体何故、彼は突然こんなことを。
混乱するエトをどこか凪いだ視線で見つめながら、グレイは自らの血が滴る腕を掲げる。ぽたり、ぽたりと血が魔法陣に落ち、落ちた個所から魔法陣がますます輝きを増した。血を媒介として、魔法陣に彼の魔力が吸い取られているのだ。
人を一人、異世界から現代日本に飛ばすだけの魔力。
それがどれほど膨大なものか、魔法に疎いエトには想像もつかない。ましてや、グレイは魔術師ではない。多少は魔力があるといっても、あくまで彼は城の騎士だ。こんな無茶をして、ただで済むとは思えなかった。
——元いた世界に、日本に帰れる。
そう告げられても、彼女は素直に喜ぶことはできなかった。
最初は訳も分からずに連れてこられた世界だった。
自分で来たいと望んだわけでもない。周囲から歓迎されていたわけでもない。
それでも、少しずつこの国の中で自分のできることを見つけて、護衛のグレイと一緒に二人三脚で今の生活を作り上げたのだ。彼には叱られてばかりだったけれど、この二年間本当に楽しかった。周囲から『聖女様』と呼ばれるまでになったのも、彼がいればこそだ。
だから、——自分が彼に恋をするのも、きっと自然なことだった。
たとえ幼い恋だと誰に馬鹿にされようと、いつか自分の口でこの想いを伝えるのだと。

そう、思っていたのに。
「話を……、お願いします、話を聞いてください！」
魔法陣から巻き起こる強い風で、彼女の声はかき消される。
グレイは何も言わずに彼女を見つめ、眩しそうに目を細めた。
ああ、今までずっと、呆れたような笑顔しか私にくれなかったというのに、今になってそんな優しく笑うなんて、卑怯じゃないか。
風に煽られて、少女の首にかけてあった青い石のペンダントのチェーンが千切れとぶ。
大切なものであるそれを追いかけて、一瞬だけ彼女の視線がグレイから逸れた。
その一瞬が、最後だった。
「絶対に、幸せになるんだエト。俺は、いつまでもお前のことを」
光が、弾ける。
ふわりと足が浮く感覚。
風が強くて、もう何も聞こえない。

それでも、『あいしている』と、彼が最後に言ったような気がした。

＊＊＊

「……んん」
チュンチュン、と鳥の鳴き声が聞こえる。そこでエト――本名、江藤夏樹（えとうなつき）の意識は浮上した。
（すずめの、鳴き声？）
日本ではありふれているその鳥を、何故か今は酷く『懐かしい』と思う。閉じた瞼越しに照らしてくる日光があまりに眩しくて、夏樹は腕を上げて目元を覆った。
（すずめなんて毎日見ているはずなのに、懐かしいなんて、変なの）
そういえば、今日は何曜日だっただろうか。昨日は友達と夜まで電話で盛り上がり、翌日の学校の準備もせずに寝てしまった。だから今日は日曜明けの月曜日のはずで、学校が……学校？
「……ん？」
先ほどよりも強い違和感に、思わず顔をしかめた。
おかしい。
今日の予定は確か、『王太子殿下の城下視察に同行する』ということだったはず。
学校など……最近、行ったことがあっただろうか。
（あれ？）
ぱちり、とようやく目を開けて、夏樹は寝ぼけた頭で周囲を見渡した。
そこは、そもそも屋内ではなかった。窓もなければ壁もない。ぽかぽかと温かい日差しがダイレクトに彼女に注いでいる。身体の下は、柔らかい草の感触。これは、完全に屋外だ。少なくとも、先ほどまでいたはずの、ファンタジーな世界の城の地下室などではない。

（……そうか、私、グレイさんに魔法で元の世界に飛ばされて）

寝ぼけた頭が、やっと正常に回り始める。

夏樹が現代の日本で女子高生をしていたのは、もう二年も前の話だ。

十七歳のある日に突然不思議な世界で目が覚めて以来、夏樹は二年間、元の世界とは異なる世界で過ごした。その生活にも慣れ、このままこの世界で暮らす未来も悪くないと考え始めていた。

――グレイに魔法で飛ばされたのは、そんな矢先の出来事だった。

「日本、帰ってきたんだなあ……」

グレイが発動したあの魔法陣は、時空転移の効力を持っていた。最近見つかったばかりのあの魔法陣があれば、夏樹は元の日本へ帰れると言われていた。しかし、帰ることができるのと実際に帰るのでは訳が違う。

――帰るなんて、私、一言も言っていなかったのに。

「グレイ、さん」

ぽつりと呟いたその名は、異世界において、最も信頼していた人間の名前だ。

日本に帰ってきたということは、もう二度とあの世界には戻れないということ。

融通が利かなくて頑固者で、それでも、いつだって異世界で夏樹の心の支えになってくれたグレイにも、二度と会えないということだ。

「私まだ、何も恩返しとか、できていない、じゃ、ないですか……」

呟いた言葉も、もう二度とグレイには届かないのだろう。言った途端に、猛烈な寂寥感（せきりょう）が押し寄

せてきた。彼には伝えたいことがたくさんあったのに、何一つ伝えることはできなかった。強制的で一方的で、どこまでも唐突な別れだった。別れの言葉すら、口にする暇もなかった。

「あんまり、じゃないですか。そんなの……」

ゆっくり起き上がると、ぽろりと一粒涙が零れた。

それを皮切りに、ぽろぽろと涙が零れ落ちる。

「グレイさんの、馬鹿……」

こんなの、あんまりだ。

もうあの世界には戻れないと知り、やっと本当の自分の気持ちが分かった。日本での日常なんていらない。こんな形で日本に帰ってこられても、ちっとも嬉しくない。

自分が進みたい道は、きっと彼の隣にあったのだ。

――そんなこと、今更気が付いても遅いのに。

「グレイさん、会いたいです」

涙が滲む。唇を噛みしめて、夏樹は子供のようにしゃくりあげた。後から後からこみ上げて、涙は一向に止まらない。

「う、ふぇ……っ……」

温かい太陽の光を浴びながら、夏樹はひたすら泣き続けた。立ち上がる元気もない。もう、どうしたらいいのか分からない。寂しくて悲しくて、ただ目の前が真っ暗だ。

バサバサッ。
「……ん？」
バサバサバサッ！
「え、な、何？」
その場に響き渡った、突然の大音量。そのあまりの音の大きさに驚いて、夏樹は勢いよく顔を上げた。先ほどまで可愛らしく鳴いていた鳥が慌てふためいて一斉に飛び立つ。
そしてその開いた空間にバサッと大きな音を立ててとまったのは、一匹の大きな鳥だった。
「グエッ、グエッ」
「……」
「グエェエ」
鮮やかな赤い嘴（くちばし）。ショッキングピンクの翼。
蛍光ブルーの尾羽に、この世の全てを馬鹿にしたような締まりのない半眼。
――この鳥を、私は知っている。
夏樹はぽかんと口を開けて凝視した。瞬時に、彼女の脳裏に一つの記憶がよみがえる。
『あの、グレイさんこの鳥、私初めて見ました』
『ああその鳥な。珍しい鳥で、本来なら国境近くの森にしか住んでいないんだ。今度の国賓に余興として見せるために一匹だけ城に運ばれてきたんだな』

『へええ、そんなに珍しい鳥なんですね』
『鳴き声が特徴的でな。古い言葉で【永久の幸せ】という意味の言葉に聞こえるらしい』
『うわあ、どう鳴くんですか？　とっても気になります！』
『まあ、落ち着けエト。焦らなくてもそのうち鳴くだろ』

グレイの言葉通り、その鳥はその会話のすぐあとに鳴いた。それがあまりに特徴的だったので、夏樹もその時のことはよく覚えている。目の前の鳥は、その時の鳥と明らかに瓜二つだった。
（ええと、この鳥って、まさか）
咄嗟に思考がフリーズしてしまい動けない夏樹の前で、今回もその鳥は高らかに鳴いた。
記憶と寸分違わぬ、高らかな鳴き声で。

「エンガチョー、エンガチョー！」
「……」

あ、これは間違いない。あの時の鳥だ。
こんなふざけた鳴き声の鳥が、そういてたまるか。
「……ええと、つまり、なんだ」
日本には絶対にいない鳥が、この場にいる。それはつまり、ここは日本ではなくまだ異世界で、

――しかも王城から遥か遠くの国境付近の森であるということだ。
「……グレイさんに、会いたいなあ……」
ボソッ、と夏樹は先ほどと同じ言葉を、しかし先ほどとは比べ物にならないほど黒いオーラを纏(まと)って口にした。
グレイさんに会いたい。
会って、全力で殴りたい。
パーではない、グーだ。拳(こぶし)で殴る。
ちょっとした手違いで、着の身着のまま、一人の護衛もなく、単身で国境付近まで吹き飛ばされた少女は吠えた。
「グレイさんの、ばっかやろぉおお！」
――どうやら自分は、転送先を盛大に間違われたようだった。

グレイの章　聖騎士グレイ＝ランバートの受難

タルテリア暦　一四五六年　異世界生活開始から三百十三日目

「ち、治療師エト、行きます！」

酷い手傷を負った同僚に駆け寄り、エトが少しどもりながら叫んだ。

どもっているのは、まだ彼女がこのような泥臭い現場に慣れていないからだろう。今自分たちが退治している魔物の群れは、一体一体はそれほど強いものではない。しかし一瞬でも油断すれば鋭い爪で手傷を負うことだってある。彼女が駆け寄った俺の同僚が、まさにそうだ。

彼の横に膝をついた彼女を庇うように、俺は背をそちらに向け周囲を警戒する。今周囲の敵はあらかた殲滅されている。だが、いつ不意打ちが来るか分からない。

（彼女一人守れないなら、俺が護衛でついている意味がないしな）

異世界から来た少女エトは、不思議な力を持ってはいたが、それ以外は何の変哲もない少女だ。俺たち聖騎士にとってはなんてことない下級魔物でさえ、彼女の命を奪うのには十分だった。万が一にもあってはならない事態を考え、俺は気合を入れなおすと音を立てて愛剣を構える。

国王陛下から彼女を任された俺の仕事は、どんな場面でも彼女の身の安全を守ること。

（さあ、来い）

彼女が同僚の傷に手を伸ばした気配を感じて、俺はぐっと息をこらえた。
ここから先は、もはや俺にとって恒例となった――楽しい楽しい、拷問の時間だ。
（さて、今日は何を考えようか……）
前回の妄想ネタは修道院の名物老シスターの裸だった。しかし、それくらいのインパクトではこれから俺を襲う彼女の猛攻を凌ぐことはできない。するとここはやはり、うちのむさ苦しい団長の残念極まりないセクシーポーズの方が効果的にげんなりすることができるだろうか。
（いや、でも何度も思い浮かべていると、慣れて効果が薄れるような気もするしな……）
並大抵のガッカリ度合いでは、彼女の能力から逃れることなどできはしない。ここは俺の精神を叩きのめすような、斬新かつ新しい想像を求めていくべきだろう。
さてどうしようか、と思考が逸れたその一瞬が、俺にとっての命取りだった。
ポウッ、とあたりに青い光が立ち込め、周囲に漂い始めた光の粒が微かに俺の腕にも触れた。
「……ッ！」
あ、まずい。
そう思った時には遅かった。
「……○×▽※◇!?」
ざわざわざわ、と一気に全身に鳥肌が立つ。花などどこにも咲いていないのに、濃厚な花の香りに包まれたような感覚。官能を無理やり呼び起こし、欲望を引きずり出されるこの感覚。腰に強烈な熱い衝撃がくる。猛烈に彼女の方を振り返りたくて仕方がない。

あの柔らかい唇に食らいつき、赤くはれるまで吸ってみたら、彼女は恥ずかしさに泣いてしまうかもしれない。あるいは、あの魅力的な太ももを撫でまわすのでもいい。「グレイ、さん」と不安そうに自分を呼ぶあの声を、自分の腕の中に閉じ込めた彼女から聞きたい。

（くそっ、また間に合わなかった！）

駄目だ、魔がさしていることを自覚するんだ。彼女はあくまで護衛対象。俺が狼になってどうする、しっかりしろグレイ！

（堪えろ、堪えろ、堪えろ……！）

ああでも、快楽というのはなんて甘美な堕落だろうか。

あと少しでも感じていたら理性など吹き飛んでしまうと感じるのに、もうちょっと、もうちょっとだけこの感覚に浸っていたいと、彼女に支配されたいと願ってしまうような……もう、お願いしますこの薄汚い童貞を詰って踏みつけて嘲笑いながら触ってくださいと土下座して泣きつきたいと思ってしまうような――

「はい、治療終了です！」

明るい彼女の声が響き、シュンと音を立てるようにあたりを包んでいた青い光が一瞬で消え去る。

（……はっ！）

同時に、俺の脳裏を占拠していた桃色の映像がかき消えた。まずいまずいまずい、一瞬本当に意識が落ちかけていた。ついでに妙な性癖に目覚めかけていた。一瞬の気の緩みから、色々と人生が終わるところだった。

「う、うぅ」
「あっ、駄目ですよまだ動かないでください。私の力で傷自体は治りますけど、副作用で眩暈とかが起こることは分かっているんですから」
「すみ、ません……助かりました、聖女様」
「ふっふっふ、お役に立てたようで何よりです」
エトが素直に喜んでいる声が聞こえる。年若い同僚の声は多少いつもより甘い気もするが、妙に息を荒らげている様子もない。少し気だるそうにしているが、それだけだ。やはり彼女の魔力に、正確に言えば彼女の治癒魔力の副作用にこんなに呆気なく敗北するのは、聖騎士団の中でも俺だけなのだろう。
（……情けなさすぎる）
今日も今日とて敗北した自分を、俺は心の中で罵倒した。
たった一人の少女の魔力で、しかも彼女自身も全く意図していない治癒魔力の副作用の方にこんなにもあっさりと負けるなんて、情けないにもほどがある。しかし、情けないと思う反面で、「こうなってしまうのは当然だ！」と拗ねたように主張する自分の本音にも気が付いていた。
今から約一年前、エトは遠い異世界からやってきた。身分も後ろ盾もない彼女だが、彼女は一つだけずば抜けた才能を持っていた。——治癒の力である。
一般的に、治癒魔法というのは才能を持った人間が呪文の詠唱によって発動させるものだ。

しかし、彼女の才能はまるで怪物並みだった。通常なら長い詠唱が必要な治癒魔法を、彼女は相手の素肌に触れるだけで即座に発動させてしまう。

その姿はいつ見ても見事で、周囲から付けられた彼女のあだ名は『聖女様』。

しかし、その反面、彼女の魔法にはとても『聖女様』なんて清らかな名では呼び難い、重大な問題点があった。

（これで、この副作用さえ、なければな……）

彼女の魔法には副作用がある。治療された本人および周囲の人間に効果を発揮する副作用。それはまあ、……簡単に言ってしまえば催淫効果だ。

男女問わず、年齢問わず、全ての人間が一瞬で理性を飛ばすほどの絶大な効果。近くに敵がいようが自分が死にそうな怪我をしていようが、そんなことはどうでもよくなってしまう。ただ彼女に襲い掛かりたい。それしか考えられなくなる。

（でも今はペンダントがあるのに、何だって俺はこんなに負け越すんだ……）

内心、悪態をついて俺は悔しさに歯噛みした。

理性を飛ばす、催淫効果。そんな悪質な副作用を持ったままでは、彼女は到底治療師としては働けない。だから彼女はうちの魔術団長が直々に作成した青い石のペンダントを身に着けている。

ペンダントをかけている限り、あの暴力的な魔力は治療を行うことができる必要最低限の量までに抑えられているはずなのだ。だから今では誰も彼女に魔力で治療されても理性を飛ばしたりはしない。名実ともに、彼女は『聖女様』と呼ばれるに足る実力を発揮している。

――残念なのは、その『誰も』の中に俺自身が含まれなかったことだろうか。
（俺だって、油断さえしなければ大丈夫なんだ。油断さえしなければ……）
屈辱に唇を噛みしめながら、自分に言い聞かせた。
別のことに集中してさえいれば、俺だってこんなに呆気なく理性を飛ばすことはない。ただちょっと、いつも少し、そう、心の準備が足りないだけだ。俺は悪くない。
（……もっとこう、俺にだって年上の余裕というものが……！）
だが悔しがってはみるものの、内心では既に諦めの境地に達していた。
こんな途方もない出力の催淫効果に勝てるわけがない。伊達に長年悲しい独り身生活をしていないのだ。二十七歳彼女なし、という筋金入りの童貞の感受性を、甘く見てもらっては困る。
「グレイさん治療終わりました、次の怪我人のところに行きましょう」
「駄目だエト、まだ動くな」
「えっ？」
「まだ、周囲から奴らの気配が消えていない」
「え、あ、はい！」
俺の真剣な声を聞き、彼女は慌てて周囲を警戒するように再度身構えた。
俺も、いつでも敵に斬り込んでいけるような低い姿勢をとる。
「……敵、どこに潜んでいるのでしょうか」
「それは分からない、殺気が消えるまでもう少し待て」

俺は険しい表情でそう彼女に言った。
（今、自分の考えていることが暴露されたら、死ねるな……）
内心の冷や汗が、どうかばれませんように。
俺が動かないのは、動かないのではなく動けないからだなんてどうして言えようか。
魔物なんて周囲にはいない。それなのに、何故俺は前かがみなのか。そんなもの、『前かがみにならざるを得ないから』だ。彼女の魔力が止まり俺の思考回路が正常に戻ったとしても、一度反応した身体がまるで魔法のように一瞬で元に戻るなんてことはないのである。
「敵、襲ってきませんね」
「いやまだだ、きっと奴らは俺たちの様子を見ているんだ」
「なるほど……勉強になります」
（うっ、毎度のことながら良心が痛い……！）
身構えたままうんうんと頷く彼女は、全く俺を疑った気配がない。
彼女は本当に根が素直だ。馬鹿正直とも言う。こんなくだらないことで騙して、本当に申し訳ない。あとで、彼女に謝る代わりに神様に懺悔しておこう。最近は神様に懺悔しなければならない事柄が多すぎる。
（……ふぅ……）
俺は一度深呼吸をして、必死に落ち着こうと試みた。二進（にっち）も三進（さっち）もいかなくなった下半身には、どうにかして可及的速やかに大人しくなっていただかなくてはならない。彼女自身からの信頼を壊

さないためにも、『聖女様の護衛』という立場を維持するためにも、絶対に、俺は彼女の能力で欲情しているとバレてはならないのだから。

（団長の裸踊り、団長の裸踊り……）

全団員を阿鼻叫喚の渦に叩き落とした数年前の惨劇を思い出し、俺は必死に下半身から意識を逸らした。くそっ、これでもなかなか萎えないとか、本気でこいつの治癒魔法は悪質すぎる。

「……いなくなった、みたいだな」

俺が前かがみを解除したのは、それからしばらく経ってからだった。

いなくなったも何も、元から何もいないのだが。

神様すみません、今日もまた俺は嘘をつきました。

「ふう……、よかった。ありがとうございます、グレイさんがいなかったら私なんかとっくに魔物の餌食ですね！」

「気にするな、それが俺の仕事だからな」

エトが俺のもとに駆け寄り、隣に並ぶ。称賛をたたえた瞳でキラキラと見つめられ、さっと目を逸らした。

（頼むからそんな目で見るな！）

今さっきまでお前を押し倒してアレコレしようとする妄想で頭がいっぱいだったなんて、どうして言えようか。魔物が百体来ても負けない自負はあるが、彼女の最大出力の魔力に当てられたらその場で発狂して死ぬ自信がある。だから、俺は決して重傷を負ってはならないのだ。彼女に治療さ

れたら、その日が俺の命日だ。
――出会った頃の彼女の魔力を思い出し、背筋に寒気が走った。
あの頃はペンダントもなかった上に、俺もまだ彼女に対する免疫がなかった。だから逆に彼女の魔法が発動した瞬間、俺は刺激が強すぎて一瞬で気絶したのである。あまりに瞬殺だったので、その後しばらく自分がその時に気絶していたことすら気が付かなかったくらいだ。
しかし、下手に免疫が付いて簡単には気絶しなくなった今、実際に彼女に治療なんてされたら……ああ、考えただけでゾッとする。理性が吹っ飛んでケダモノになるだけでは済まないだろう。
断言しよう、俺は絶対に廃人になる。
「今日の戦い、少なくとも夕方までは続くだろう。お前も、魔力の配分には十分気を付けろよ」
傍で護衛する俺の精神が持たないからな。
「はい、でもまだまだやれますから！」
「あまり、張り切らなくていいぞ。無理は禁物だ、エト」
「グレイさんは心配性なんですよ。まるでお父さんみたいです」
「なんとでも言え。お前に無理をされるよりマシだな」
「日頃のお礼と言っては何ですが、もしグレイさんが怪我したら私全力で治しますから言ってくださいね！　怪我する前より元気にしてみせます！」
やめてくれ、エトお前なんて恐ろしいことを言うんだ。怖すぎる。
「……お前に頼るような怪我を、しないよう気を付けるさ」

「グレイさんなら、特別にかすり傷でも治してあげますよ！」
「そうか。なら、かすり傷もしないように戦う」
「もう、確かにグレイさんは強いですけど慢心は駄目です。油断につながるんですから！」
「ああ、そうだな」
油断など微塵もないけどな。
全力で本気だ。むしろ怯えすら感じている。
俺は剣を持っていない方の手を伸ばして、彼女の頭を軽く撫でた。随分と軽そうな兜と甲冑の籠手が当たって、ガシャガシャと音を立てる。
「まあ、頑張れ。適度にな。あくまで、適度に」
「ああもう、グレイさんの心配性！」
――不服そうに拗ねる彼女の隣で、俺はばれないようにこっそりため息をついたのだった。

夏樹の章　聖女様とシチューとポチ

「で、どうすればいいんですかね、これ」

右も左も分からない土地に飛ばされ、しかも人影すらない。

何から手を付けていいのか途方に暮れ、夏樹は呆然と立ち尽くした。

好きな人の所業とはいえ、流石にこれはむごい。たぶんお茶目な手違いなのだろうと信じてはいるが、これが故意の所業なら死ねと言っているようなものだ。城下街がある分、ただ城から放り出されるだけの方がマシだった。

いきなりうら若き乙女が着の身着のままで放り出されて、どうしろというのか。

「……グレイさん。怒らないから、近くにいるなら出てきてくださいよ……」

返事はない。いつも呼ばなくても傍に居てくれた人は、今はその気配すらない。

「本当に独りぼっち、かあ」

ため息をつきながら、夏樹はそっと自分の姿を見下ろした。今日の格好は、この国の一般的な普段着であるワンピース型の上着とズボン、靴はこれまた一般的な革のショートブーツ。ここは、舞踏会向きのドレスではなかったことを喜ぶべきなのか、旅装でもない普段着であったことを悲しむべきなのか。……いや考えるまでもないか、悲しむべきだ。

「地図もないし、コンパスもないし！」

時空転移の魔法陣が用意されていたのは、城の地下室だ。グレイに誘われてその部屋に入った時にはまさかこんな事態は予想していなかったので、当然ながら外套すら羽織っていない。
「せめて何かポケットに入っていればいいんだけどなあ」
夏樹が服のポケットをひっくり返すと、多少の銅貨がジャラジャラと出てきた。
「……」
ひい、ふう、みいと数える。
「ああうん、駄菓子くらいなら、買えるかな」
思わずガクッと膝をついた。こんなささやかな装備、露ほどの役にも立たない。今は飴玉を買うお金よりも飴玉がほしい。食料がないと分かった途端、ぐうと腹の虫が音を立てた。
(じ、実は案外人里に近いとか)
微かな希望に縋って周囲を見渡すが、視界に入ってくるのは森、森、森、湖、小鳥、森。
なんてこった、獣道すらない。
「……餓死したら恨んでやるぅうう」
もう何度目か分からないグレイへの呪詛を吐き散らしながら、夏樹は精神力を振り絞って立ち上がった。こんなところで呆気なく死んでたまるか。
享年十九歳、死因が好きな人のケアレスミスとか本当に笑えない。
『立ち止まるな、死にたいのか！』
――大切な人が昔そう言っていたのを、ふと思い出した。

そうだ、だから私は異世界に落ちるという異常事態に直面しても、不審者呼ばわりされて投獄されそうになっても、魔物と対峙するような目にあっても前に進んできたんじゃないか。人生に、立ち止まっている暇はないのだ。どんなに理不尽でも、立ち向かわなくてはならない。

ありがとう、貴方の言葉で私はまだ頑張れます。

――まあ、今回の災難に関しては全部グレイさん貴方のせいですけどね！

「とりあえず、人里を目指そう、かな」

幸い、太陽の位置からして時刻はまだ昼前といったところか。進む方向を間違えなければ、猟師小屋くらいは見つかるかもしれない。

足元に落ちていた手ごろな枝を拾い、見よう見まねで構えて進んだ。装備が普段着と樫（かし）の枝とか、今時どこのロールプレイングゲームだ。どうせなら薬草か回復ポーションもあればよかった。

「ううう、怖い、怖すぎる。絶対に何も出ないでくださいよ……！」

途中、突然出てくる鳥や狐に怯えながら、ただひたすら野性的直感のみで突き進んだ。

今できることは自分を信じて進むことだけだ。これでも、幼少時より迷子になった時に自力で帰還する率は百パーセントを誇っている。夏樹の人生の標語は『進めば人生なんとかなる』だ。

「殴る、絶対殴る、次に会ったらまず殴る……」

森で独りぼっちという不安を吹き飛ばすために、ひたすら小声でそう呟いた。もちろん殴る対象は、素敵な異世界の片想い相手、グレイである。

彼のことは好きだったし今でも好きだが、今はもっぱら憤怒の対象でしかない。

「グーで殴る。ボコボコにしてやる。絶対に殴る……！」
言いたいことならごまんとあった。何故話も聞いてくれずに強制送還しようとしたのか、とか、そもそも今日は完成した魔法陣を見せてくれるだけではなかったのか、とか。
他にも、思い出してみれば不満だらけだ。
何故やたらと夏樹の魔力による治療を拒むのかとか、治療師として周囲に認められてもなかなか前線に連れていってくれなかったこととか、初めて見た魔物に怯えて眠れずに夜に相談に行った時は逆にものすごい剣幕でお説教されたこともあった。
正直、食い殺さんと飛びかかってきた魔物より『その格好は何だ！　年頃の娘がはしたない！』と親の仇みたいに睨んで説教をかましてきたグレイの方がよっぽど怖かった。あまりの恐怖に、女官が偶然通りかかるまで廊下で膝をガクガクさせていたのもしっかり覚えている。
「……なんだか、思い出したらイライラしてきた」
殴る殴ると物騒な単語を発していると、自分がまるで強くなったようで気持ちも大きくなっていく。最初は泥棒のように潜めていた足音も、途中から全く配慮しなくなった。
苛立ちを発散させるように、むしろ大きく足音を踏み鳴らして歩いた。来るなら来い！
「よし魔物でもなんでも出てこい、私の怒りに怯えて顔すら見せられないか臆病者！」
「ガウゥ」
「なんだ！　唸ってばかりでは話にもならない、……ぞ？」
……「ガウゥ」？

たらりと頬を垂れる冷や汗。
勢いよく引いた血の気を感じながら、夏樹はゆっくりと振り返った。
「ガウゥ」
「ク、……クマ」
そこにいたのは魔物より、酷く見慣れた姿。動物園で過去に見かけた黒い熊が、そこにいた。この世界の生き物なので呼び方は多少違うかもしれないが、見た目だけなら完全に日本のヒグマだ。
「……ハ、ハロー」
そっと片手を上げて挨拶をする。
「……」
「……」
熊からの返事はない。
ぐっ、駄目か。この世界の熊は実は人語を喋る友好的生物である可能性に賭けたのだけど、残念ながら結果は夏樹の負けと思ってよいだろう。
「あ、私のことはですね、食べても美味しくないですよ。異世界人なんか食べたらお腹を壊してしまうかもしれません、悪いことは言わないので思いとどまりましょう、ね？　ね？」
熊から視線を逸らさず、夏樹はじりじりと後退した。一応、気持ちだけでもと樫の棒を正面に構えているが、熊に襲われて棒ごときで撃退できるなら、そもそも恩返しの手段として治療師なんか目指していない。

「ガゥウウ……」
「そう、貴方はきっと賢い熊です。こんな貧相な女の子より美味しい獲物はたくさんあると思うわけです。だから、その牙をしまってここは穏便に」
「ガァウワァァァ！」
「すみませんでしたぁあああ！」
熊の後ろ脚が力強く地面を蹴ったのを見て、夏樹は咄嗟に一か八かで右に飛び込んだ。バランスを崩して尻餅をついた彼女の目の前、僅か数センチの距離を凶悪な熊の手が過ぎ去り、これ以上は引かないと思っていた血の気がますます引いた。
恐らく左に飛んでいたら直撃しただろう。両親に散々サルだのハトだの馬鹿にされただけあって、相変わらず自分の動物的直感だけは冴えわたっているようだ。
（て、撤退撤退！　まだ死にたくない！）
熊が態勢を整えようとたたらを踏んだその一瞬を逃さず、夏樹は一気に熊に背を向けて走る。
しかし、その踏み込んだ先が悪かった。
ずるり、と。
茂みの奥、隠れて見えなかった泥だまりで盛大に足が滑る嫌な感覚。
（あ、これ、やらかした）
足を踏み外した瞬間、逆に冷静になった頭で思った。なんとなくこうなる気はしていた、と。
「助けてグレイさぁあああん！」

「ガウゥ……」
崖から落ちていく途中、こちらを見下ろし唖然とする熊と目が合った。
こら、そんな同情的な目で見るんじゃない熊。
私だって不本意だ。

＊＊＊

鼻腔をくすぐる、香ばしいパンの匂い。ことことと音を立てているのは、シチューか何かだろうか。ああ、おいしそう。森で遭難していたはずなのに、こんなに美味しそうな匂いがするなんて。きっとここは天国だ、私、死んだに違いない。
思えば短い人生だった、と胸の中で回想に浸ることもそこそこに、夏樹は勢いよく飛び起きた。
「ごはんの時間ですか！」
食欲に勝るものなど、夏樹の中には存在しない。
「……って、あれ？」
見覚えのないベッドに、見覚えのない内装。夏樹は今自分がいるのがどこなのかさっぱり分からず、一人ベッドの上で首を傾げた。寝起きの頭を酷使して、必死に直前の記憶をさらう。
ぬかるみに足を取られて落ちた。いや、その前にそもそも熊に襲われた。いやいや、それよりも全ての元凶はグレイだ。

あの最後に見た彼の切なげな微笑みといったら、もう。
たぶん本気で別れを惜しんでくれていたのだと思うと、心底憎たらしい。
「おのれ、グレイさん、絶対に、生きて城に帰って殴ります」
絶対にぎゃふんと言わせてやる。本気で嫌がられたために今までやらなかった、ペンダントで抑制していない最大出力の魔力をもって治療してやるんだからな。きっと全力を出せば多少は効果があるはずだ。
性欲なんてまるでありませんよという顔をしたあの朴念仁を、あんあん言わせてくれるわ！
思い出した怒りに夏樹が打ち震えていると、誰もいなかった部屋に一匹の闖入（ちんにゅう）者が現れた。
「きゅん！」
「……『きゅん』？」
思わず鳴き声の方に視線を向けると、そこには一匹の柴犬によく似た生物がいた。
はっはっは、と舌を出しながらこちらを見つめる姿は、なんともまあ。
「か、可愛い！」
「きゅん！」
「しかも鳴き声があざとい！」
えええ、こっちの国の犬って「きゅん」って鳴くのか。嘘だ。許さん、かわいい。
「君、お名前はなんていうんですか？　このおうちの犬ですか？」
「きゅん！」

「うううう、よく分からん。まあいいや、とりあえず暫定ポチだ。ね、ポチ、ここはどこだい？」
「きゅんきゅん！」
「君の言葉は私には難しいよ、ポチ……」
「勝手に人んちの犬に妙な名前を付けんじゃないよ」
「え？」
突然割り込んできた声に、夏樹は再び部屋を見渡した。
部屋の中に人影などない。それならば一体どこから――。
きょろきょろと見渡す夏樹の視界で、暖炉の傍にあった毛布の塊がのそりと動く。
いや、毛布ではない。よく見れば中から人の手が生えている。しわしわの手が、ゆっくりと被っていた毛布のような外套を下ろした。
ギョロリとした目で夏樹を見つめる老婆と目が合う。
「ぎゃぁあああ！　悪い魔女だぁあああ！」
「なんだい、人の顔を見て第一声がそれとは、最近の若者はどうしてこうも礼儀知らずなんだい」
「きゅん！」
「ん？　ああブルーメ、別にお前のことを責めたわけじゃないよ、安心おし」
「え、うわ、あああ……あ、あれ、もしかして、お婆さんが私のこと、助けてくれたんですか？」
ポチ――いや、ブルーメと会話する老婆の姿を見て、ようやく夏樹の頭に多少の冷静さが戻ってきた。冷静になってみれば、この状況は明らかに助けられた人間と助けた人間の構図だ。

「馬鹿言ってんじゃないよ、あたしがなんでアンタみたいなちんちくりんを助けなきゃなんないんだい。助けたのは、こっちのブルーメだ。森で行き倒れているアンタを見つけたのも、ここまであんたを荷車に乗せて引いてきたのも、ブルーメさね」

毛布の中から姿を現したのは、まるで童話の『悪い魔女』のような老婆だった。髪はぼさぼさ、前歯は欠けている。爪は長くて、目の下を縁取る隈は酷く濃い。老婆がそっと手を伸ばして撫でると、ポチ――もとい、ブルーメは嬉しそうに尻尾をぶんぶん振り回した。

ブルーメ駄目だよ騙されてるよ、そのうちお前も食べられちゃうよ。

「そう、だったんですか、すみません、突然人が現れたのでビックリしてしまって。助けていただいて、本当にありがとうございます。ブルーメも、本当にありがとう！」

「きゅん」

「礼なんか言ってる暇があったら、さっさとこれでも食べな。ただし、シチューに文句なんか言ったら叩き出すからね」

よしよし、とブルーメを撫でていると、湯気を立てているシチューが目の前にドンッと置かれた。

思わずゴクリと喉が鳴るが、仮にも城では『聖女様』なんてあだ名で呼ばれていた身。ここで、食欲に負けて盛大にかきこむなんて醜態をさらしたら、またグレイさんに「年頃の娘がみっともない！」とお小言を言われてしまうかもしれない。

いや、でも、だがしかし。

「……すいません、いただきます！」

江藤夏樹、十九歳。食欲に屈した瞬間だった。

＊＊＊

「……それで、アンタはなんであんなところで行き倒れてたんだい？」
ご厚意に甘えて食後の果物までご馳走になっていると、そこでやっと老婆が口を開いた。
よくぞ聞いてくれました！　とばかりに夏樹はずいっと身を乗り出して語りだす。
「お婆さんはレイノーマ国の王都に現れたという、『聖女』の噂を聞いたことがありますか？」
「ん？　ああ、なんでもおとぎ話の聖女イヴみたいに、触っただけで何でも治しちまうっていう馬鹿みたいに優秀な治療師の話だろう。こんな辺鄙な村でも、そのくらいの噂は流れてくるよ」
「そうですか……。あの、驚かないで聞いてくださいね」
「なんだい畏まって」
「私が、――実はその『聖女』なんです」
「……」
夏樹がそう言うと、老婆は数拍の沈黙を挟んだあと、「なるほどねえ」と呟いた。
「信じてくれるんですか？」
「ああ、信じるさ。アンタがあの噂の聖女様っていうんだろ」
「そうなんです、その通りなんです！」

まさか最初から信じてもらえるとは思っていなかったので、夏樹は飛び上がって喜んだ。
――世の中には素敵な人がたくさんいるものだ。
ホクホクする夏樹の前で、老婆が小さく眉を寄せて口を開く。
「泥だらけだったから、どこかは怪我しただろうと思ってたけど、よりによって頭の大事なとこをぶったんだねえ、アンタ」
（あ、全然信じてない）
老婆が見せる酷く同情的な視線が、胸に痛い。
「ち、違います違います、本当に噂の治療師なんです！」
「馬鹿言ってんじゃないよ、聖女様は噂じゃお上品で麗しい絶世の美少女だっていうじゃないか。アンタみたいなちんちくりんのどこに共通点があるっていうんだい！」
バァンッ、と勢いよく机を叩いて怒られた。なんという仕打ち。噂の一人歩きって怖い。
「ほ、ホントですよ、ちゃんと治療師の証だって持って……」
慌てて、夏樹は自分の胸元を探った。
治療師はそれぞれに王家から証となるものを賜り、肌身離さず持ち歩く。そしてそれは、この国のほとんどの場所で通用する身分証となる。夏樹の場合は、青い石のペンダントがそれだ。
特に夏樹のそれには、治癒魔力を必要最低限の量にセーブするための魔術団長直々のおまじないまで掛かっている。一応ペンダントなしにも治療は行えるが、周囲の人間を全員問答無用で理性のとんだケダモノにさせてしまう残念エロケアルなど、頼まれてももう二度と使いたくはない。

ともかく、そのペンダントさえあればどんなに夏樹本人が噂の絶世の美少女と人物像がかけ離れていようが、夏樹こそ噂の聖女であると納得せざるを得ないはずだ。
「ここにですね、身分証のペンダントが、……ペンダント、が」
――ない。
（え、あれ、うそ、……本当に？）
サアッと音を立てて血の気が引く。
一体どこで紛失したのだろうと、記憶を必死にさらった。

――『絶対に、幸せになるんだ、エト』
微笑むグレイ。魔法陣から吹き荒れる風。
光が弾ける寸前、グレイの後ろに見えた、宙を舞う青い石。

（……そこか！）
あの時だ。そういえば、突風でペンダントが飛ばされたのを見た気がする。
（一体、どこまで私をどん底に叩き落とせば気が済むんですかグレイさん……！）
思わず血の涙でも流しそうだ。絶対許さん、殴る時はグーではなく裏拳にしよう。
「なんだい、急にこの世の終わりみたいな顔なんかして」
「いえ、その、治療師の証を、諸事情で紛失しまして……」

「ああ、いいよいいよ、その設定はもういいから。行き倒れてた事情を隠しておきたいってことはもう十分に分かったよ」
（これはひどい）
アンタも大変だったんだねえ、としみじみ同情された。
なんだろう、とても今泣きたい気持ちでいっぱいです。
「それで、その……王都の方角を教えていただけたら、ご迷惑になる前に早々に去りますので。この度は、本当に私なんかを助けていただき、この御恩はいつか必ずお返しさせていただきたく……」
「はあ？　何言ってんだいアンタ」
老婆は、見た目にそぐわず快活にからからと笑った。なんと、恩返しなんて気にするなと笑ってくださるのか。なんと大らかな方だろう。悪魔信仰とかしてそうなんて思ってごめんなさい。本当にあなたは素敵なおばあ様で――
「いつかなんて、馬鹿なこと言ってんじゃないよ」
老婆は、表情を一転させて、ニタァと邪悪極まりない笑みを浮かべた。
「御恩なら、今すぐ身体で返しな。……逃がしゃしないよ小娘」
――もう嫌だ、誰も信じない。世の中は悪意に満ちている！

グレイの章　聖騎士グレイと彼女の出会い

タルテリア暦　一四五五年　異世界生活　一日目

「……」

春も近づいてきたある日。グレイは日課の朝練に行こうとした道すがら、城の中庭で珍妙なものを目にした。昨日の酒がまだ抜けていないのかと、二、三度目を擦ってみるが、見えているものが全然変わらない。

「ん、いやいやいや、……うん？」

何故、城の中庭のど真ん中に少女が寝ているのだろうか。

芝生の上に仰向けになり、両手を胸の上で組んで横たわる姿は、まるで何かの物語の一節のよう。さらさらと風に舞う黒髪から、不思議と目が離せない。

侍女、いや城で働く誰かの娘かもしれない。どちらにしても、何故こんなところで寝ているのか。

一体、こいつは何を考えて――まさか、死んでいる？

「お、おい！　大丈夫か！」

咄嗟に、不審者を疑うより先に駆け寄って少女を抱き起こした。彼女はぐったりとしていたが、呼吸は落ち着いている。どうやら大事には至っていないようだ。

「おい、おい！　起きろ、どうしたんだ！」
「ん、う……」
やや乱暴にゆさゆさと揺さぶると、まるで起こされるのが不快だというように彼女が小さく眉を寄せた。呻くような吐息が唇から零れる。少女が身動きをしたせいで、抱え込んでいた腕が転がり落ちそうになり、グレイは慌てて彼女を抱えなおした。
（え、女ってこんなに軽いのか？）
困惑を隠しきれないまま、グレイは少女の頬を軽く叩く。
恐々と触りすぎて、叩くというよりはつつくといった方が相応しい。生まれてこの方、剣は握っても女性などまともに触れたことのなかったグレイには、どれくらいの力で触れてよいものか分からなかった。
――大丈夫だよな、つついたら痣になって「責任とって結婚してください」とか言われたらどうしよう。新手の結婚詐欺だったりしないよな。
「おい、誰かは知らないが、大丈夫か！」
「うん……ん」
根気強く何度か揺すると、少女がうっすらと目を開けた。グレイと目が合う。
（綺麗な、黒い瞳……）
ミステリアスな黒い瞳に、思わず吸い込まれそうだ。
それはまるで、おとぎ話に出てくる聖女様のようで、ずっと見つめていたくなるような……。

グレイが何も言わずに固まっていると、『聖女様』はじぃっとグレイを見つめ、そしてその可愛らしい瞳を丸く見開いた。
「ぎ……」
「ぎ？」
「ぎょわぁあああああ！」

――そして、城内にとてもミステリアスとは呼べない無様な絶叫がこだました。

＊＊＊

タルテリア暦　一四五六年　異世界生活　四百八十二日目

「なんですかグレイさん、人の顔をそんな胡乱気（うろんげ）に凝視して。何かついてますか」
林檎をもしゃもしゃと皮ごと齧るエトを前に、物思いに耽っていたグレイはハッと我に返った。
二人の間には、籠に盛られた林檎の山。城下の人間から治療のお礼に分けてもらったものだが、果物ナイフがなかったので二人とも皮ごと豪快に齧って食べている。グレイは口の中の林檎を咀嚼（そしゃく）し飲み込むと、少し疲れたように首を振った。
「いや、別に気にするな」

「気になりますよ、言ってくださいよ」
「ここで素直に言ったらお前が怒ることぐらい、流石に俺にも分かる」
「ほう……大丈夫です、もうその発言で怒りましたから、どうぞ気にせず言ってください」
「……お前と初めて会った時、一瞬でもお前が可憐な少女に見えた俺は目がどうかしていたんだなとつくづく痛感していた」
「えええ！　なんですかそれ、私は今でもか弱い乙女ですよ！」
「皮ごと林檎に齧りついている奴が乙女を語るなおこがましい」
「それはないですよ！　そもそも、グレイさんが剣貸してくれないのが悪いんです。私のせいじゃありません」
「次にまた聖騎士の剣で林檎を剥こうとしたら、泣くまで正座で説教コースだからな！」
「えええええええ」
殺生な！　とエトが悲鳴を上げるが、むしろ国王陛下に神聖なる誓いをたてた愛剣で林檎を剥こうとした不敬を考えれば、そのくらいで済まそうとしていることを感謝してほしいものだ。果物ナイフなら城の厨房にあると言ったのに、それを聞かずにエトが「嫌ですよ、私はもぎたてが食べたいんです！」と町はずれの丘に腰を下ろしてしまったため、なし崩し的に二人は昼下がりの丘で林檎を齧っている。
「グレイさんは頭が固いです」
「俺はまともだ。お前の発想が独創的すぎるんだ」

「え！　ありがとうございます」
「褒めとらん！」
「ええー……」
不服そうに呟き、また林檎を齧り始めたエトを、グレイはそっと横目で見た。厄介な副作用を持つ強大な治癒魔力を秘め、そして数奇な巡りあわせでグレイが護衛をする羽目になった少女。
か弱い外見に似合わず、意外に強(したた)かで、たくましい。
頑固で我が強いくせに、何故かグレイに懐いて雛みたいについてくる。一度力を使えば、周囲の人間全員を欲情させることができるくせに、普段の彼女にそんな気配は全くない。婀娜(あだ)っぽい様子などまるでない、いたって普通の女の子だ。
肩より少し長い綺麗な黒髪は、今は仕事に邪魔だからと横で緩く一つに括られている。
この国では珍しい黒い瞳は、拗ねたように細められていた。
（黙っていれば、そこそこの容姿、なんだがな……）
勿体ないような、これで良かったような妙な気分だ。
鍛錬にばかり精を出していたら、いつの間にかグレイは女性というものにほとんど接さずに過ごすようになっていた。だから、今も女性をどう扱っていいのかさっぱりだ。しかし、エトの傍は気が楽だった。恐らく、彼女自身からあまり『女性』を感じないからだろう。容姿の無駄づかいだと思う反面、色気ではなく生命力の塊みたいな彼女を好ましいとも思っている。
まるで妹ができたみたいだと思う。彼女の無茶ぶりに付き合うのも、だいぶ慣れた。

こうやって一緒に林檎を丸齧りするのも、本当は少し楽しいと感じ始めている。……なんとなく悔しいので彼女には言わないが。

昔の所在なさげにしていた彼女も、そこから立ち上がって自分の足で歩いてきた彼女も、決して短くない時を傍でずっと護衛として見てきた。だから、この世界で誰より彼女を知っているのは自分だという自負があるし、泣き言一つ言わず前に進む彼女を、自分のことのように誇らしいと思う。

出会った時のミステリアスな聖女様より、こっちの方が、ずっといい。

風が吹いた。

春の陽気に、林檎を齧る彼女の笑顔。

「なあ、エト」

「はい」

「ずっとこうしていられたら、贅沢だと思わないか」

「え？」

エトは何を言われたのか分かりかねる、という顔をして、残り一つになった林檎をちらりと見た。

「いや、林檎がもっと食べたいって意味じゃなくてだな」

「違うんですか？　あ、それなら貰ってもいいですか」

「あー、……食ってもいいが腹壊すなよ」

「これくらいでお腹壊したりしませんよ、またグレイさんは私のこと子供扱いして！」

「まあまあ、そう怒るな」

――いつかお前が帰るその時まで、せめて子供扱いさせてくれ。

また不服そうな顔に戻った彼女の頭を片手で適当に撫でなだめつつ、グレイはからからと笑った。

彼女からは死角で見えないその顔が、とても優しく切ない笑みであることに、エトもグレイ本人も気が付いてはいなかった。

異世界生活　3日目
この世界にやってきて3日が経った。部屋も、薄暗い地下室からまともなベッドのある部屋に移った。グレイさんに尋ねると、どうやら私が他の国からのスパイではないと判断されたかららしい。まったく、酷い目に遭った。とりあえず、紙と羽ペンは貸してもらうことが出来たので、今日から記録用のメモを取ることにする。目標：日本に帰る！　記念すべき初回の話題はあ、グレイさんに怒られた。寝よう。また明日！

異世界生活　4日目
このレイノーマ王国には、なんと驚くべきことに魔法がある！でも、使えるのは一部の人だけらしい。もちろん私は使えない。グレイさんも使えない。ちなみに、グレイさんというのは、頻繁に私の見張り当番になるお兄さんのことである。拾ってくれた人で、初日から大体毎日会っている。いつも仏頂面をしているけど、たぶんいい人だ。なお、私の処遇は今偉い人たちが会議中らしい。冤罪で捕まったりしないことを願うばかりである。　あと、この国のごはんは美味しい。

イラスト：黒ごま

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/